

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：34404

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520297

研究課題名（和文） トマス・グレイと1760年代の古詩収集家（1）

研究課題名（英文） Thomas Gray and Collectors of Ancient Poetry in the 1760's (1)

研究代表者

片山 麻美子 (KATAYAMA MAMIKO)

大阪経済大学・経営情報学部・教授

研究者番号：50183778

研究成果の概要（和文）：イングランドのトマス・グレイ、ウェールズのエヴァン・エヴァンス、スコットランドのジェイムズ・マクファーソンによる古詩収集の活動を、ブリティッシュネスやケルトの起源説など文化人類学や歴史学の学際的な視点を加えて考察した。1760年代の三者の古詩復活の取り組みが統合後のイギリスにおける国民意識の高揚を反映する一方で、民族の伝統やアイデンティティ喪失の危機感と表裏一体であった点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The research focused on the recovery of ancient poetry by Thomas Gray, Evan Evans and James Macpherson, adopting an interdisciplinary approach of cultural anthropology and history to the literary studies. These poetical movements coincide with the period of forging British identity after its national integration. However, they also showed the other side of the same coin in Wales and Scotland, their concerns about declining culture and losing identities under the pressure of Anglicization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英語・英語圏文学

キーワード：トマス・グレイ、古詩復活、ケルトの再発見、ブリティッシュネス、ウェールズ、

1. 研究開始当初の背景

(1) 全体構想

本研究の目標は、グレイの古詩研究を調査することによって、18世紀におけるロマン派への価値転換、すなわち、自然、古代や中世という民族の歴史的過去、また古典と対比された自国の素朴な古詩に対する再評価の様相を明らかにすることにある。グレイがイングランドおよび周辺国家の古詩に関心を持った経緯、彼自身による古詩研究を調査し、同時代のマクファーソンや、パーシー、エヴァンスなどの古詩収集家へ与えた影響を考察する。連合王国として国家意識が形作られ、近代の市民社会へと変貌した18世紀イギリスにおいて、古代社会の自然との関わりや民族の歴史のなかに新しい詩歌のかたちを模索したグレイの後期の文学活動を再評価することが最終的な狙いである。

全体の構想は以下のように集約される。

①グレイが古詩に関心を持つに至った経緯と古詩復活運動を概観

②グレイによるイギリス詩史執筆の試みと古詩再評価

③1750年代のグレイ自身の古詩研究

ア. 古代ブリトン民族への関心と国民意識の高まり——「詩仙」(“The Bard”)

におけるブリトンの吟唱詩人の造型

イ. メイソンの『キャラクタカ』(*Caractacus*)執筆支援と自由の精神

ウ. イギリスの言語と詩歌の形成——「カンブリア」(“Cambria”)におけるウェールズの詩法研究

エ. 「カンブリア」におけるバルドおよびドルイドの好古的知識とモリス・サークル

④ グレイと1760年代の古詩収集家

ア. マクファーソンの『オシアン作品集』

イ. エヴァンスの『ウェールズ古詩集』

ウ. パーシーの『イングランド古詩拾遺集』

エ. ビーティの『ミンストレル』

⑤ 18世紀イギリスにおける古詩復活の背景と新しい詩歌の創造

今回は研究課題を「トマス・グレイと1760年代の古詩収集家(1)」と定め、上記④「グレイと1760年代の古詩収集家」のうちアとイを遂行した。古詩はイギリスを形成してきた個々の民族の歴史を直裁に語り、土着の自然と霊性を素朴に称揚する。マクファーソンやエヴァンスによる1760年代の古詩復活はイングランド周縁の国家においていわゆる「ケルト」の民族意識を高めた。グレイが、これらの古詩収集家と交流し、古詩復活の理念を模索していた事実と彼らとの歴史認識の相違を考察した。

(2) 研究の学術的背景

グレイはRoger Lonsdaleの注釈、Robert Mackによる伝記など一部を除き、最近の18世紀の詩人研究では大きく取り上げられることが少ない。一方、古詩復活の研究では、Howard Gaskill, Fiona Stafford, Mary-Ann Constantine, Nick Groomたちが90年以降成果を上げてきた。また、Linda Colley, John Collis, Eric Hobsbawm や Prys Morganなどは歴史学および文化人類学の分野で、18世紀のイングランド、および周縁の「ケルト」と呼ばれる地域における国民精神と民族意識の形成について活発に議論している。古詩復活は、イングランドと周縁の民族の国民意識や民族意識を考える上で重要な要素とな

るが、グレイが古詩復活に果たした役割の研究は欧米でも不十分で、部分的に論じられるに留まっていた。グレイがケルト復興に果たした役割についての議論は、20世紀初頭のEdward SnyderやPowell Jones以降極めて少なかったが、近年ウェールズで再び注目されてきた。本研究はグレイを古詩復活の中心人物のひとりとして捉え直し、これらの学際的な研究成果を取り込んだ古詩復活運動の再評価を試みている。

2. 研究の目的

(1) 研究の目的

本研究期間内では、スコットランドとウェールズの古詩復活に焦点を当て、1760年代に古詩復活運動を推し進めた二人の収集家の民族意識と彼らの口承詩復元の実相を解明することを目的とした。マクファーソンは『オシアン作品集』をハイランドの叙事詩として発表し、文学のみならず、スコットランドやケルトの民族意識の発揚に貢献した。今回は彼を支援したスコットランドの知識人たちとともに、叙事詩という伝統の創造過程を跡付けようとした。一方のエヴァンスは、ウェールズ語が衰退していく中で、『ウェールズ古詩集』を出版して民族の詩歌を記録にとどめる役割を果たした。ケルト民族起源論を唱えた好古家の存在や、グレイの「詩仙」などウェールズの古詩を復活するうえでの影響関係を探究した。

(2) 研究の特色・独創的な点と意義

本研究は、グレイが社会に果たす役割を模索し、歴史研究に解決を求めた姿に注目する点で、これまでの叙情性を重視した詩人研究と異なる。18世紀中葉における古詩復活はロマン主義の発展の上で重要な役割を担っていたが、グレイが古詩収集の

運動において指導的な役割を果たした事実は十分認識されていない。またグレイと彼らの相互の関わりから自然と民族に深く結びついた古代人の理想像が形成されて、結果ロマン派へと受け継がれていった側面が考察されることも数少ない。当該研究は、従来古典主義とロマン主義という二つの時代の狭間で見過ごされてきた、18世紀中葉の詩歌と歴史観の転換を、グレイを通じて理解しようとするものである。

特に近年のナショナリズムと民族起源の議論を踏まえ、グレイの古詩への関心が、イングランドに統合されたスコットランド、ウェールズの祖先とされるブリトン人の歴史に遡及していた点に注目している。グレイがイギリスの詩歌の起源を探索し古代の詩人像を造型していく過程は、広く民族・言語・歴史と関わる、18世紀イギリスの精神風土の在り様として提示できるのでないかと期待する。

グレイやメイソンの古詩研究やウェールズを扱った歴史テーマの作品は、当時のイングランドの立場によるイギリスの国民意識を示す一方、スコットランドやウェールズの視点では文芸復興への影響を与えたと予測される。特に従来看過されてきたウェールズの古詩を考察する意義は大きく、アイルランドとスコットランド中心のケルト史観に新しい視点を取り込むことが期待できる。

3. 研究の方法

本研究は全体の構想として、グレイがイングランドおよび周辺地域の古詩に関心を持った経緯と、彼自身の古詩研究を、備忘録の草稿を中心に調査し、同時代のマクファーソンや、パーシー、エヴァンスなどの古詩収集家へ与えた影響を検証してい

る。結果として、18世紀の社会的な変動のなかで、詩人の役割を模索し、新しい詩歌の創造を試みたグレイを再評価したい。そこには従来、社会性に乏しい叙情詩人と考えられてきたグレイが、当時の国民精神や民族意識の高揚に強い関心を持ち、歴史と自然や土地に結びついたイギリスの新しい詩歌を作ろうとした姿が明らかになるのではないかと考えている。

研究の方法として特に重視している点は第一次資料の検討であり、18世紀当時のケルトの起源を論じた文献の調査と、古詩集やケルトを主題とする詩歌など文学作品の精読を旨としている。グレイの「カンブリア」やメイソンの『キャラクターカス』だけでなく、Henry Rowlands (Mona Antiqua Restaurata, 1723)やAylett Sammes (Britannia Antiqua Illustrata, 1676)などの好古家の文献を、資料の収集と整備も含めて独自に検討してきた。

また近年の学際的に開かれた議論を取り入れ、社会的歴史的な視点からの検討を心掛けた。今回の研究では1760年代に出版されたマクファーソンとエヴァンスの古詩集を中心に、当時の好古家によるケルト民族起源論と関連させて古詩復活運動の歴史的背景を考察した。

今後の研究では、パーシーやビーティの詩集を検討し、全体として1760年代の古詩復活がもつ文学上、歴史上の意味を再評価したい。グレイが支援したイングランド、スコットランド、ウェールズの各地域での古詩復活における、民族意識、詩歌と詩人に対する捉え方、歴史認識、またそれぞれの地域における土地と自然の捉え方が明らかになってくると期待する。

上記の研究は原則として研究代表者が単独で行ったが、補助金を得て渡英し、大

英図書館やオックスフォード大学での文献調査と資料収集を行った際、ウェールズの研究者から数度にわたり文献紹介と研究上の助言を受けた。ここに改めて感謝の意を表したい。また研究は学際的な視野をもつため、英文学関係の学会だけでなく、ケルト学会など他分野の研究者の成果や助言を受けながら計画を進めてきた。

研究ではグレイ、メイソン、マクファーソン、エヴァンス、パーシー、ビーティ、クーパーの詩人による作品、書簡などの基本資料を使用した。加えて、以下では歴史学、人類学などの主な参考文献を挙げる。

Collis, John. The Celts: Origins, Myths and Inventions.

Gloucestershire : Tempus Publishing Limited, 2003.

James, Simon. The Atlantic Celts: Ancient People or Modern Invention?

London: British Museum Press, 1999.

Morgan, Prys. "The Hunt for the Welsh Past in the Romantic Period." The Invention for Tradition, Eds. Eric Hobsbawm and Terence Ranger.

Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

Davies, John . A History of Wales.

London: Penguin Books Ltd, 1993.

Kliger, Samuel. The Goths in England.

Cambridge: Harvard University Press, 1952.

Snyder, E.D. The Celtic Revival in English Literature. Cambridge, 1923.

Davies, D.W. ed. Wales and the Romantic Imagination. Cardiff: University of Wales Press, 2007.

原聖 『民族起源の精神史』(岩波書店、2003) および、『ケルトの水脈』(講談社、2007)

指昭博『「イギリス」であること』(刀水書房、1999)第4章を参照。

4. 研究成果

(1) 成果の概要

本研究はイングランドのケルト趣味と周縁地域のケルト復興運動に内在する民族/国民意識を、双方向の視点で論考した。

まず、グレイがピンダロス風オード「詩仙」を執筆した背景を探り、18世紀に統合された連合王国のもとでイングランド/ブリテンの詩歌の可能性を模索していた問題意識を考察した。またクーパーの「ボアディシア」(1782年)では、国の危機に際して、バードが果敢に侵略者に立ち向かい、言霊によって呪詛し、将来の民族の繁栄を予言する。これによって18世紀のイングランド/ブリテン国家の繁栄を読者に示そうとしていた。

本研究では「ボアディシア」に最も鮮明に表れるように、イングランドのケルトの主題は、ブリテンを標榜した統合の意識を形成することで、フランスやアメリカなど対外的な緊張関係のもとでの、国民意識の形成に寄与する意図が存在することを明らかにした。

一方、統合後のイングランドの文化政策のもとで、自らのアイデンティティをケルトの民族起源に求めて、口承による古詩の収集にその過去を創造しようとした周縁地域の収集家たちの姿を明らかにしようと試みた。

1760年代にマクファーソンが『オシアン作品集』を発表したとき、彼とスコットランドの文人たちはケルトの末裔として壮大な叙事詩の断片を発見したと語った。同様にエヴァンスは『ウェールズの古詩集』を発表して、ブリトンの吟遊詩人バードが歌いつないだ詩歌を世に問うた。双方とも、グレイのオード「詩仙」と同様に、吟遊詩人が祖国の歴史を語っている。これら二人の古詩集には、連合王国の統合下でケルト/ブリテンの末裔としての起源を誇る民族意識とそれぞれの地域の文化を復興しようとする国民意識とが内在することを考察した。

最後に、従来のブリティッシュネスの議論

では言及されていないグレイの「カンブリア」の音韻研究を取り上げた。グレイが「カンブリア」で論じた詩観は、イングランドの詩歌がウェールズのブリトン人とアングロ・サクソンとの異なる言語文化の接触によって生まれ、イングランドの詩歌にウェールズの押韻が影響を与えたとしている。一方的なイングランド側による文化の押し付けではなく、ウェールズの詩歌の独自性を認めるグレイの捉え方が、「詩仙」を生み、ウェールズ古詩収集家の自国の文化の再評価の後押しを行ったと考える。

(2) 主な実績

①エヴァンスの『ウェールズ古詩集』およびグレイの「詩仙」と「カンブリア」

グレイの「詩仙」はウェールズの古詩や伝統文化を再評価する役割を果たし、近年ウェールズの国民文学研究で注目されている。ケルト再発見とブリティッシュネスの議論を踏まえ、なぜグレイがイングランド王であるエドワード1世によるウェールズの詩人虐殺の伝説を「詩仙」の主題においたかを再検討した。特にウェールズ音韻論によってイギリス統合後の新しい詩歌を模索していたグレイの詩観を「カンブリア」を参照し独自に考察した。研究の成果は“Welsh warbling in English Poetry”と題して平成24年7月にバンゴール・ケルト研究学会で発表が決定している。

②William Cowperの”Boadicea”と18世紀後半のケルト趣味について

古代ブリテンの女王を歌った頌詩はグレイやメイソンのケルト趣味とオードの系譜に連なり、さらに1780年前後のアメリカ独立戦争を背景にした危機意識と連合王国の統合意識を反映している。当時のイングランドのケルト趣味は国民意識を高揚させる意図を持っていた。論文は関西コーリッジ研

究会で口頭発表を行ない、加筆原稿が平成 23 年度にケルト学会誌に掲載された。

③マクファーソンの『オシアン作品集』とケルト民族意識

グレイをはじめとするイングランドの文人の対応とマクファーソンやブレアなどスコットランド側との応酬を検討し、『オシアン作品集』のケルト的性格付けに対する再評価を行った。マクファーソンは『オシアン作品集』の序論でケルトの末裔としての民族意識を打ち出している。

論考は「ジェームズ・マクファーソンの『古詩断片集』覚書」と題し、『オシアン作品集』出版に重要な役割を担った『古詩断片集』の成立過程と、ブレアが叙事詩の存在を示唆した序文の文化背景について平成 23 年度に『大阪経大論集』で発表した。

④D. Walford 編 Wales and the Romantic Imagination (Aberystwyth, 2007) の書評 (ロマン派学会の機関紙掲載)

この研究書は 18-19 世紀のケルト言説や、イオロ・モルガニッグの活動、イングランドの詩人によるウェールズ表象などを文化だけでなく政治的社会的背景から分析した論集である。ロマン派にかけてのケルト趣味の展開と、南北ウェールズの相違などウェールズ独自の視点を持ち新しい知見に富む。

⑤ケルト民族起源論に関する資料整備

John Collis、Eric Hobsbawm や Prys Morgan、また Linda Colley などの研究を参照し、ウェールズのケルト民族起源論とナショナリズムの影響を概観した。特にケルト民族起源論に関しては、ローランズやサンメスなどの第 1 次資料を整備し、18 世紀ウェールズにおける「ケルトの再発見」と当時の好古的な知識がグレイやメイソンの作品に与えた影響を考察した。

⑥上記の他、平成 22 年度にコートールド美

術館で、17 世紀末に Henry Cook(e) が描いたドルイドの 3 枚の絵画について画像と画家名の確認などを行い、作品の時代背景を考察した。(参考:C. Brisby, “Druids at Drayton”)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

(1) 片山麻美子、「クーパーの「頌詩 ボアディシア」と 18 世紀後半のケルト趣味」、『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会)、第 14 号、pp. 29-40, (2011 年 10 月) 査読あり

(2) 片山麻美子、書評 Damian Walford Davies, *Wales and The Romantic Imagination* (イギリス・ロマン派研究 第 34 号、2010 年) 査読あり

<http://www.soc.nii.ac.jp/jaer/>

(3) 片山麻美子、研究ノート「ジェームズ・マクファーソンの『古詩断片集』覚書 (James Macpherson's *Fragments of Ancient Poetry*)」、『大阪経大論集』第 62 巻第 3 号、2011 年 9 月、大阪経大学会、205-213.

[学会発表] (計 2 件)

(1) KATAYAMA Mamiko、Welsh warbling in English poetry: Thomas Gray and his Pindaric ode ‘The Bard,’ The Inaugural Bangor Conference, Bangor University, 2012. 07. 22, Bangor, UK.

(2) 片山麻美子、「18 世紀後半のドルイド趣味—クーパーの「頌詩 ボアディシア」を読む」第 145 回 関西コールリッジ研究会例会 (立命館大学)、2010(平成 22)年 4 月 24 日

6. 研究組織

研究代表者

片山 麻美子 (KATAYAMA MAMIKO)
大阪経済大学・経営情報学部・教授
研究者番号 : 50183778